



村ごとに設置されている診療所。保健普及員が常駐し、初期的な診察、治療を行っている

標高の高い
雨の中の診療所

激しい雨が、レンガ造りの小屋の屋根に打ち付ける。平日の昼下がり、つい先ほどまで青く澄みわたっていた空は、瞬く間に、灰色の厚い雲に覆われてしまった。

「雨が近付いてきたよ!」。子どもたちが教えてくれてから、大粒の雨が落ちてくるまでそう時間はかからなかった。7月初旬、日本は梅雨明け間近だが、ここ、アフリカ東部のエチオピアは雨期に入ったばかり。雨が降ると、気温もぐっと下がって肌寒い。

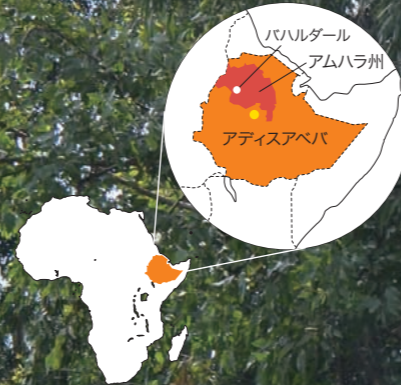
田んぼの真ん中に、ぼつんとある小屋。ここに来るまでは、まさに「道なき道」だった。四輪駆動車も入れず、あぜ道を何十分も歩いてたどり着く。その矢先の雨だ。国内2番目の人口を抱えるアムハラ州、標高1800メートルの州都バハルダール郊外の小さな村にある診療所だ。

「雨宿りしていただくさいね」。そう声をかけてくれたアメルマル。

エチオピア
from ETHIOPIA
地域ではぐくむ力

アフリカの人々にとって、感染症は日常の病。現場では一体、何が起きているのだろうか。その答えを探すべく、アフリカ東部のエチオピアに飛んだ。

写真=久野武志(カメラマン)



アバテさんは、肩から小さな箱をぶらさげている。中身を見せてもらうと、発泡スチロールの中に注射器と薬剤が。「赤ちゃんが生まれたばかりの家に、予防接種に行ってきたんですよ」。彼女はこの村の保健普及員。約1年の研修を経て、この診療所に配属されて3年になる。「一番多いのはマラリア。雨期になると感染者が増えるからもう大忙しよ」。彼女を含め2人のスタッフで、約7000人の村人たちの健康を守っている。

マラリア。私たち日本人にとっては決して身近とはいえないが、エチオピアでは、農村部を中心に広がる日常の病。命を落とす人さえいる。「マラリア原虫を媒介する蚊はきれいな水を好みます。雨が降った後の水たまりは、彼らにとって最高の住みかなのです」。今回の旅の案内人、公益財団法人結核予防会結核研究所の太田正樹医師が教えてくれた。彼を含む日本人専門家チームは、アムハラ州保健局と共に、この地域から感染症をなくそうと奮闘している。

雨の中、一人の男性が診療所のドアをたたいた。「数日前から熱っぽいんだ」。話を聞いてみると、どうもマラリアの症状に近い。検査キットで調べてみると、陽性の可能性が高いようだ。「薬を出しますね。食後に飲んでください」。アバテさんはそうアドバイスをし

て「お大事に」と見送った。

マラリアに苦しむ人と
立ち向かう人

次の日は、一路、町中の保健センターに向かった。朝早くにもかかわらず、赤ちゃんを抱いた母親、作業着姿の男性、子どもを連れた父親…、多くの人でごった返している。「早く診てくれ!」といわんばかりだ。



村の診療所で働く保健普及員。「私たちがやるべきことをやれば、必ず病気は防げる。そう信じています」。ピンクの紙は、保健センターへの報告書だ



マラリアの感染を調べる検査キット(右)と病気予防の啓発活動に使う教材(左)



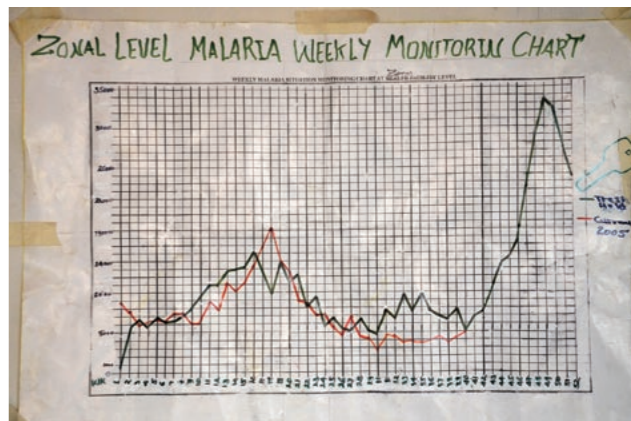
赤ちゃんをおぶって診療所に向かう女性。エチオピアの人々にとって、医療施設へのアクセスは決して良いとはいえない



マラリアの治療薬をどのくらい処方したかを記載。このような情報をまとめて報告する



保健センターで血圧を測ってもらう女性。彼女の家からここまでは約2時間の道のりだった



保健センターに掲示されたマラリア感染者の数を表したチャート。数値的な傾向分析を今後の対策に生かす



窓越しにマラリアの陽性検査を受ける男性

エチオピアではたいてい最初は村の診療所に行き、症状がひどい場合は町の保健センターに回される。しかし、診療所は無料だが、保健センターは有料。家から何十キロも歩かないといけない場合も多く、なかなか足が向かず症状が悪化してしまうことも多い。「数日前から頭が痛くて、食欲もないんです」。そう話す女性の顔は、ぐったりとしている。血圧を測ってみると、通常よりも高い。「血液検査をしてみましょう」。診察内容を書いたメモを渡されて、

隣の部屋へ行くように促される。人差し指から採血し、シャーレに移して顕微鏡で調べる。患者とのやり取りはすべて窓越しだ。「建物が効率的に診察ができるような設計になっていないんですね」と太田医師。日本の病院といえば、無機質なほどの清潔さがうり。それとはほど遠い環境だ。医療施設も十分に整備されていない、人々の生活環境も決して衛生的とはいえない状況の中で、感染症を防ぐのは決して容易なことではない。政府も各家庭に蚊帳を

保健センターで診察を待つ人々



**正しい情報を
みんなで集める**

車に揺られること約3時間、もう一つ、別の村の診療所を訪ねた。すぐ隣では、牛飼いの少年がムチを持ち、数十頭の牛と格闘している。そんなのどかな風景とは裏腹に、この地域にもマラリアなどの感染症がまん延している。

ここで保健普及員として働くセネット・アトナフさんは、勤続7年のベテランだ。「私の周りにも感染症に苦しみなながら、亡くなってしまった人がたくさんいる。みんなの役に立ちたい。その一心でこの仕事を選んだんです」。感染症は、早期の診断、治療が生死を分ける。みんなが連携して、感染症の流行や兆候を見逃さないことが重要なのだ。

そこで力を発揮するのが、地域の保健ボランティア。診療所とも連携しながら、定期的に家庭訪問をし、村の人々の健康状態を確認している。「村の診療所でさえ、歩いて何時間もかかることもあります。そういう人たちのためのボランティアです」とアトナフさん。住民たちと同じ目線で相談に乗ってくれると評判だ。

「なぜやっているかって？ それはみんなが健康に生きられるようになるためよ」。アムハラ州保健局長のゼベレル・デウディ副局長は真

つすぐな瞳でそう語る。帰り道、また冷たい雨が降り出した。どんなに激しい雨でも、人々はその手を止めることなく、それぞれの仕事に汗を流す。その姿はどこか神秘的で、たくましく見えた。

この国の人々は、決して現状から逃げることなく、今に立ち向かっている。そんな命が一つたりとも奪われてはならない。そのため、今も現場では挑戦が続いている。



太田医師と保健局長のデウディ副局長。保健局長は、保健センターで勤務していた。保健局長は、保健センターで勤務していた。